



第 66 号 (年 4 回発行) 編集発行 前学 院大 学 会 弘 報 委 員 会 印刷所 (有)小野印刷所

筋肉の話し

学長 吉岡 利忠



昨年は、ブラジルのリオデジャネイロでオリンピック・パラリンピック大会があった。走る、飛ぶ、投げるが基本となる陸上競技、水泳競技、格闘競技、球技、その他多様なスポーツに、12時間の時差のあるリオで日本選手の活

躍に一喜一憂したに違いない。

からだの機能をフル回転させて日ごろのきつい訓練から得られた競技力を発揮する4年に一度の最大のスポーツの祭典である。真夜中テレビ観戦で、エリート選手

常々、大学の講義でも話しているのだが、人間のみならず、動物・植物の全てがその環境に馴染み適応し順応し順化して行くということ。

オリンピック選手なら尚更のことで、過酷な訓練で体つきまで変わってしまう。逆にきまどくも少ないと、体に負

講義の締めくくりには、だから勉強して脳みそを使え、使えば脳機能は活性化するぞ、体を動かせ、そうすると年取ってから足の衰えも防げるぞ、骨が脆くなるのを防

一般に筋細胞は細長い形態をしているので筋線維と表現している。とすると、同年代のヒトで鍛えられ遅くな

たり歩いたり走ったりしているからである。重力が無くなる

ところで、筋肉には、特に骨格筋において目で見た色合いにより、赤い筋肉と白い

筋線維は太くなるので外面から観察される全体の筋線維は太

また、面白いことに赤い筋

細胞が含まれる。成長の過程で徐々にその数が増して行く

さて、下肢の筋肉は上腕の筋線維より発達しており太い

多く、赤い筋線維が多く、中間の筋線維は中間の筋線維細胞

筋線維は太くなるので外面から観察される全体の筋線維は太

また、面白いことに赤い筋

多く、赤い筋線維が多く、中間の筋線維は中間の筋線維細胞

中長期目標実施計画の確立・実践に向けて

学校法人弘前学院 理事長・学院長 阿保 邦弘



一 初夢

二〇一七年四月から「弘前学院大学中長期目標実施計画」がスタートする。三年間単位の実施計画を三回繰り返し、創立一四〇周

年の年には中長期目標を達成することを目指している。そもそも本学院には、二〇〇五年九月に発表した「弘前学院経営の理念と方針」が存在する。

それから十年経過した二〇一五年九月頃から、「弘前学院経営の理念と方針」をより具体的に実現するための計画を検討してきた。

さて、いよいよ新展開を目指す二〇一七年を迎えたわけだが、新年早々不思議な夢を見た。

「この場に立つと、創立一三〇周年の頃を懐かしく思い出します。

あの時期、今の本学院の隆盛を想像することはできませんでした。

感謝申し上げます。さて、第二期実施計画時期が終わる頃には校舎の新築案が浮上り、第三期実施計画

また、新しい創造を求めて果敢にチャレンジする精神にも充ちていました。

六新年度 私の展望 青森県主要団体・企業トップインタビュー (東奥日報 二〇一六・三・三一)と題した

今後の目標については「教育機関とは、個性と特徴を明示し、実践におけるたゆま

現在の弘前学院は、定員の増加や学部の新設も可能な状況とな

キリスト教に基づいた人格形成に努め、専門的な職

ただ一つ、「生徒・学生の大きな成長」です。

この伝統を忘れることなく、弘前学院が今後も地域社会

2016年度

弘前学院大学学位記授与式

- 文学部 第43回
- 社会福祉学部 第15回
- 看護学部 第9回
- 大学院社会福祉学専攻修士課程 第13回
- 大学院文学部研究科修士課程 第11回

◇日時：2017年3月18日(土) 午前10時～
◇場所：弘前学院大学体育館

卒業記念礼拝

◇日時：2017年3月17日(金) 午前10時～
◇場所：礼拝堂



研究紹介 35

日本語にとつての、漢語と和語、漢字と仮名

— 受容と表現 —

文学部・大学院文学研究科 教授 藁科 勝之



専門は国語学の語彙論ですが、とくに漢語・漢字の受容・撰取の様相を対象に、今まで、訓点資料の『遊仙窟』訓読、江戸時代の小説の読本の表現(とくに『雨月物語』を中心とする読本の表現)、江戸時代の

唐語学と『雑字類編』を中心とする唐語辞書、幕末から明治における近代漢語などについて研究してきました。

最近、『雨月物語』における文字遣い、語法、表現に関する論文を書いています。

『雨月物語』は日本古典文学の中でも最も優れたものの一つですが、実は国語学的にも大変魅力的な要素を内在するものと考えています。例えば

秋成の文字遣いの意図について、ウラミという和語を、そのウラミのありかたの相違によって「恨」「怨」の2つの漢字で書き分けていたり、アハレを書くのに漢字の「哀」と仮名の「あはれ」を使い、またヲサナシという和語を、「幼」「稚」と仮名の「をさな

し」で表記し分けまます。仮名を用いるのはなぜなのか、漢字表記に工夫をするのは近世の作家では普通のことですが、秋成は、漢字だけでなく仮名に対しても、ある種の工夫と

いうか、仕掛けを施していたのです。その意図とは何かを探ってきました。

また『雨月物語』には、係結の正用法を破る特異な用法がみられることで知られていますが、これは彼が敢えて意図的に破っていることが明らかになりました。では、どのような意図からなのか。40年

間未解決の課題について私なりの解を示しました。

さて近年は、近世の津軽方言に関して、関係資料の探索・発掘および津軽方言の研究を再開しています。30年前に弘前に住み始めたのを機に、近世津軽の国語学関係資料を渉猟していたところ、偶然、津

軽版栗栗毛とも称すべき『奥州道中記』、および方言辞書『方言訛語』という近世方言資料を発見し、いくつか論文を発表しました。近世津軽方言の資料探索や研究については、他の研究や業務の方に時間をとられて30年以上放置しておりましたが、たまたま縁あって本学院の教員になったのを

機に、地域研究の一環として、さらに探索範囲を抜け、少しずつですが、新しい近世津軽方言を発見しつつあります。どうぞ期待してください。

地域総合文化研究所講演会報告

文学部 大学院文学研究科 准教授 入江 英弥

地域総合文化研究所では、毎年数回の講演会を、学内のみならず、市民の皆様とともに考える集いとして開いている。平成二十八年度は、七月

十六日に大学院文学研究科との共催で、弘前大学教授の渡辺麻里子氏による弘前藩主の

教養に関する講演と、本学教授の藁科勝之氏による近世津軽方言に関する講演、十一月

十九日に本学院創立一三〇周年を記念して、客員教授の野口伐名氏による本多庸一の教育観についての講演を行った。

十二月三日には、「平成二十八年度学園都市ひろさき高等学校機関コンソーシアム活性化支援事業費補助金対象事業」の一つとして「琴と弓」をめぐる講演会を開催した。弘前

市民文化交流館、多世代交流室を会場として、五十名ほどの方々の参加を得た。この十二月の講演会について報告したい。

一番目が、研究所客員研究員の鈴木克彦氏による「縄文琴—シヤマニズムの弦楽器その初現形態」と題する講演であった。八戸市是川中居遺跡・つがる市亀ヶ丘遺跡から出土した篋形木製品は、弥生・古墳時代の弦楽器と同形態をとることから「琴」と推定され、世界最古の弦楽器であると主張された。また、これは、シャーマンが利用したと述べられた。

二番目が、研究所所長の山篤氏による「古代の琴と弓—招魂の弦楽器」と題する講演であった。記紀の大山守

命の反逆譚にみられる宇治川の歌を取り上げて、とくに「渡り瀬に 立てる あづさゆみ まゆみ」を「梓弓・真弓」と解して、これらの弓は水死者の霊を招く呪具で、死者の上がつた川辺の祭場に立てられたものと説かれ、もともとの歌の内容を推察された。

三番目が、本学客員教授の笹森建英氏による「イタコの弓」と題する講演であった。イタコが用いる音具の中で、弓が最も重要な役割を担っていたことを指摘され、弦を打つことによる音の現象がいかにその場の雰囲気を作り出すかを、実演を通して具体的に示された。また、イタコは、弓を招魂の呪具として使用しなかったと考えられると述べられた。

中世においては、弓は楽器としても利用され、広島県甲奴郡上下町に伝えられている中世芸能の「弓神楽」では、長大な神々の物語を語る際の伴奏楽器として使用されている。筆者は二回見学したが、弓が「招魂の呪具」かどうかは、今後も考えていかなければならないと感じた。

第12回看護学部 リカレント教育を終えて

看護学部 講師 川村 泰子

平成28年度リカレント教育は盛会の中に終了することができました。リカレント教育は基礎教育の修了後、生涯にわたる教育と他の諸活動を交互に行う教育システムといわれています。本学では看護学部の開設以来、地域貢献の

ひとつとして、看護師等が教育機関を利用し、学習する機会として行ってきました。現場の実態を把握し、どのような内容が大学に求められているのか、前年度に実施した参加者のアンケート結果から判断し、企画に活かしています。中でも求められているのは「看護研究」に関する内容です。本年度はテーマを「リカレント教育の原点を見つめて」とし、その中心に「看護研究」を置き、研究に加え、看護に関する新たな学習の時

間を加えて実施しました。参加者は延べ72人、遠くは三沢市からの参加者もありました。貴重な時間を割き、参加する方が参加してよかった、研修で得た内容を業務に反映することができるといいます。

1回目は、現場での気づきを看護研究に活かすことを中心に柳澤教授から、文献検索の方法と実際に菅原講師からPCを用いた演習を含めて行いました。2回目は

肝臓に関する再学習として、千葉教授から肝・胆路野形態と肝硬変、川村講師から生活習慣と肝疾患、川崎くみ子講師(弘前大学)から移植医療と看護の役割について話していただきました。3回目は、研究の展開について阿部教授から、続いて質的な研究の進め方について幸山講師が担当しま

した。終了後には各講師のもとに参加者が進めている研究について質問を持ち寄るなど、日々の研究活動とリカレント教育を関連させて捉えていることが分かり、継続してきたリカレント教育が根付いてきたことを感じました。受講者はいずれも「有意義であった」「看護に活かしたい」と感想を述べておられました。

大学ができる地域貢献のひとつに、地域の大学として地域に愛され、活用していただけることがあると考えます。受講者からいただいた感想を次年度に活かし、地域の期待にこたえることができる内容にする努力をしたいと考えております。



琴と弓—招魂の弦楽器

ポケモンGOの健康効果

看護学部 講師 宇田 宗弘

でいるのは主に散歩をしている中高齢者であるようです(私もその一人)。

さて、このポケモンGOの健康に対する効果についての研究が昨年発表されました。すでにいくつかのメディアでも取り上げられていますが、簡単にその内容を紹介します。

この研究では、ポケモンGOを始めて1週目は、ポケモンGOを始める前よりも1日の歩数が約千歩増加しますが、6週目にはポケモンGOを始める前の1日の歩数に戻るものと示されています。したがって、ポケモンGOの歩数を増加させる効果は一時的であり、その効果は持続しないということでした。

健康や美容のために運動を始めても、それを継続できなかった経験をしたことがある人は多いのではないのでしょうか。運動が健康を保持増進することはすでにご存知だと思いますが、運動を習慣化するのには難しいことです。どのようにして運動を習慣化させるか、その方法を見出すことが研究課題となっています。

ポケモンGOはポケモンを捕獲することが目的であり、身体活動量(歩数)を増加させることを目的としたものではありません。しかし、一時的ではありますが、身体活動量を増加させます。私はポケモンGOに日常生活で身体活動量を増加させるヒントが隠さ

れていると考えています。ポケモンGOの身体活動量を増加させる魅力が分析され、ゲームだけではなく、社会のいろいろな場面に応用されることを期待しています。

第12回看護学部 リカレント教育を終えて

看護学部 講師 川村 泰子

ひとつとして、看護師等が教育機関を利用し、学習する機会として行ってきました。現場の実態を把握し、どのような内容が大学に求められているのか、前年度に実施した参加者のアンケート結果から判断し、企画に活かしています。中でも求められているのは「看護研究」に関する内容です。本年度はテーマを「リカレント教育の原点を見つめて」とし、その中心に「看護研究」を置き、研究に加え、看護に関する新たな学習の時

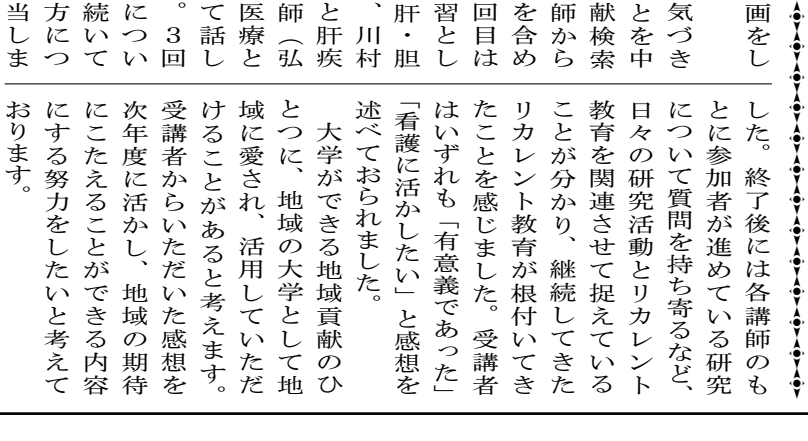
間を加えて実施しました。参加者は延べ72人、遠くは三沢市からの参加者もありました。貴重な時間を割き、参加する方が参加してよかった、研修で得た内容を業務に反映することができるといいます。

1回目は、現場での気づきを看護研究に活かすことを中心に柳澤教授から、文献検索の方法と実際に菅原講師からPCを用いた演習を含めて行いました。2回目は

肝臓に関する再学習として、千葉教授から肝・胆路野形態と肝硬変、川村講師から生活習慣と肝疾患、川崎くみ子講師(弘前大学)から移植医療と看護の役割について話していただきました。3回目は、研究の展開について阿部教授から、続いて質的な研究の進め方について幸山講師が担当しま

した。終了後には各講師のもとに参加者が進めている研究について質問を持ち寄るなど、日々の研究活動とリカレント教育を関連させて捉えていることが分かり、継続してきたリカレント教育が根付いてきたことを感じました。受講者はいずれも「有意義であった」「看護に活かしたい」と感想を述べておられました。

大学ができる地域貢献のひとつに、地域の大学として地域に愛され、活用していただけることがあると考えます。受講者からいただいた感想を次年度に活かし、地域の期待にこたえることができる内容にする努力をしたいと考えております。



第12回看護学部 リカレント教育を終えて



昨年の7月、日本でもポケモンGOの配信が開始されました。ポケモンGOはいろいろな場所に配置されたポケモンを、歩いたり走ったりして探し、それを捕まえるゲームです。私も配信された直後から始め、現在ではレベル26、124種類のポケモンを捕獲しています。配信された当初はポケモンを探するために弘前公園にたくさん若者が集まっていたのですが、最近ではその光景も全く見かけなくなり、ポケモンGOを楽しん

認知症サポーター養成講座を終えて

社会福祉学部 教授 葛西 久志

2016(平成28)10月5日(水)に、認知症サポーターキョラバンメイト(弘前愛成会病院認知症疾患医療センターの精神保健福祉士、看護師等)による認知症サポーター養成講座が開催されました。対象者は、精神保健学を学んでいる学生を中心に行いました。

現在、認知症サポーターは全国に約713万人(平成27年12月末現在)おり、地域において認知症の方が穏やかに生活するための見守りや環境整備に尽力されています。

今回の講座のねらいは、学生という若い人たちに認知症高齢者に対する正しい理解と、対応方法について学んでもらうことでした。主な講義内容は、①認知症とは、どのようなものか ②認知症の症状について(中核症状と周辺症状) ③認知症の診断や治療について ④認知症予防について ⑤認知症の方に接する時の心構えと介護者の気持ちの理解について ⑥認知症サポーターにできることは何か でした。また、講座後半では、寸劇を通して認知症高齢者に対するかわり方のよい例や悪い例についても紹介されました。

さて、認知症サポーターになったからといって、何かをしなければならないということはありません。サポーターは認知症を正しく理解し、認知症の人や、その人を取り巻く家族の良き理解者たりうる存在です。サポーター各自が出来る範囲での活動でも構わないのです。

今後は「地域包括ケアシステム」という、公的サービスを地



講師：弘前愛成会病院 精神保健福祉士 北島さん(左) 須藤さん(右：弘学OB)

卒業論文を終えて

文学部日本語・日本文学科 4年 斎藤かれん



大学での学びの集大成である卒業論文に、私は『少女の消費』を選んだ。それは一体どういうことかと首を傾げるかもしれない。一般的に消費とは物財に使われる言葉だが、今回はより大きな意味として「欲を満たすもの」と定義した。論文では、メディアに登場する「少女」は「自分を肯定してくれる価値」であるという論説を基に、それを裏付ける三つの例を挙げた。

「少女」に注目したそもそものきっかけは、2年前に聴いた

あるラジオ番組だった。パーソナリティがアイドルについて語っていた時、突然「消費」という言葉が出てきたのだ。当時の私は、その言葉がモノだけなくヒトにも当てはまるのかと驚いた。以来、テレビなどでアイドルを見かける度に頭の中で「消費」という言葉が回って回り、興味が募っていった。

そして、青森県立美術館で開催された『美少女の美術史』展』がそれを決定的なものにした。「少女」という概念がひとつの歴史として批評の対象になり、それが展覧会という形で観覧できると。これを観て私は確信した。「少女」にはなにか特別なものが隠されて

かをしなければならないということはある。サポーターは認知症を正しく理解し、認知症の人や、その人を取り巻く家族の良き理解者たりうる存在です。サポーター各自が出来る範囲での活動でも構わないのです。

今後は「地域包括ケアシステム」という、公的サービスを地

かをしなければならないということはある。サポーターは認知症を正しく理解し、認知症の人や、その人を取り巻く家族の良き理解者たりうる存在です。サポーター各自が出来る範囲での活動でも構わないのです。

今後は「地域包括ケアシステム」という、公的サービスを地

第9回卒業研究発表会を終えて

看護学部看護学科 4年 佐藤 由理



看護学部の第9回卒業研究発表会が平成28年12月3日(土)に行われました。

私たち看護学部4年生は、4月から指導教員とともに、病院実習、就職活動、国家試験対策の勉強など並行しながら、卒業研究を進めてきました。

私は、「新卒看護師の職業継続意思決定に関する要因」というテーマで研究を進めてきました。近年、新聞などでも報道さ

最後の、受講した学生には、地域活性の担い手、リーダーとして期待されており、頑張ってくださいと願っています。

自問する日々がありました。その度に指導教員とゼミのメンバーが一緒になって考えを整理してくれたことで研究を進めることができました。

卒業研究発表会当日は、先生方をはじめ下級生など多くの人が教室を埋め尽くし、張り詰めた空気の中で順番を待ちました。緊張の面持ちで、しかし、私たちは1年間の研究成果を出さるために何度も発表の練習をしてきたので、大きなアクシデントもなく、全員が無事に発表を終えることができました。

卒業研究を終えて、研究のプロセスを学ぶことや長期継続して研究に取り組む体験をすることができました。これらのことを臨床で勤務する際に生かしていきたいと思えます。今後は、看護師・保健師の国家試験にて4年生全員が合格して笑顔で本学を卒業できるよう努力していきたいと思えます。

弘前学院大学での生活

交換留学生ソウル神学大学 金 石圭



私が日本に来たのは今から約9か月前の4月、少し雪が残っていたが段々暖かくなる春でした。日本にわたって来る前、渡った後の何日間かはとても不安な気持ちで過ごしました。異なる国、異なる文化、外国というのはそれだけ重い言葉だと思えます。父親は「人が暮らす所は全部同じはずだ。だから、緊張しなくてもいい。」と

今までの暮らしを振り返ると、困難がありました。最も大変だったのは会話でした。私は結構内気な性格なので話しかけたり、かけられたりするのがとても苦手でした。何かを言おうとしても言葉が口の外まで出てこない事も多かった。言い換えれば、日本人との会話その物が怖かったとも言えます。

その上、会話している間に失礼とか間違いをしてしまう恐れもありました。だが、周りの皆さんが先に話しかけてくださったおかげで、やっと日本人との会話に慣れました。私の下手な日本語にもかかわらず話をさせて下さって、何と感謝して良いのかわかりません。日本語だけではなく日本の暮らしも皆様のおかげでたくさん学ぶことができました。まだ、日本語らしい日本語を話すという課題が残っていますが、それは私自身が頑張らなきゃならない事だと思えます。

時間が過ぎ、もう雪が降る季節です。この間、韓国に帰る様々な思い出をつくっていた

第5回就活祭(就職活動報告会)

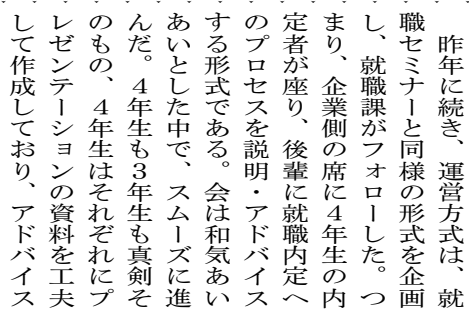
平成28年12月24日(土)、就職祭が実施された。これは、4年生内定有志者主催(通称十十)のメンバーによる就職活動報告会であり、4年生10名、2・3年生合わせて43名が参加した。

就職祭の目的は、就職祭をとおして、3年生は本格化する就職活動へのステップとし、4年生は、社会人基礎力を養う機会としている。

昨年に続き、運営方式は、就職セミナーと同様の形式を企画し、就職課がファロローした。つまり、企業側の席に4年生の内定者が座り、後輩に就職内定へのプロセスを説明・アドバイスする形式である。会は和気あいあいとした中で、スムーズに進んだ。4年生も3年生も真剣そのものの、4年生はそれぞれにプレゼンテーションの資料を工夫して作成しており、アドバイス

や経験談・体験談を熟っぽく語り、2・3年生はメモを取ったり、質問したりと一生懸命であった。失敗等を聞き、注意点や面接の対策を具体的に知り、就職活動の際のポイントをつかめたようである。

この就職祭を機に就職活動に積極的にチャレンジして、就職先を決定してほしいと期待するものである。(就職課)



できました。どうぞ、私のことを韓国から来た変な人とは思わずに、良い思い出として皆さんの心の片隅に残していただきたいと思えます。私はそろそろ帰らなければいけません。私が帰国した後も、ソウル神学大学

と弘前学院大学の良い関係が続いてくれば嬉しいです。今まで、こんな私に親切にしてくださいました学生の皆さん、教職員の方々、コートをくださった学長さん、本当にありがとうございます。



文化サークルフェスティバル in 弘前学院

12月11日(日)、「文化サークルフェスティバル in 弘前学院」が開催されました。同フェスティバルは、今年度、創立130周年記念式典と日程が重なり、弘前学院を主催する場を設けることを目的に4団体(吹奏楽団、軽音部、書道部、天体観測同好会)



開会式で挨拶する吉岡学長

ポスター

「文化サークルフェスティバル in 弘前学院」を終えて

文化サークルフェスティバル代表兼吹奏楽団団長
日本語、日本文学科三年 鈴木 優美

平成二十八年十二月十一日(日)、「文化サークルフェスティバル in 弘前学院」と題して学内でイベントを行った。私は吹奏楽団団長兼このイベントの代表を務めた。

このイベントの発起人は私であった。平成二十八年度は学祭を行わないという話を聞き、「代わりには私達でイベントを行ってみたい」といった思いからイベントを企画した。イベントを企画するにあたり、出演して下さる文化サークルの代表の方とのミーティングを行い、どのような形で行うかを検討した。その結果、日曜日の午後四時、学内の講義室を使用し、イベントを行うことに



充実感いっぱいメンバーの皆さん

が集結し、吹奏楽団によるコンサート、軽音部によるバンドライブ、書道部と天体観測同好会による展示や発表を行ったものです。当日は地域住民や本学の学生ら約150名が会場を訪れ、大いに盛り上がり、無事に終了することができました。ご来場くださった皆様にお礼申し上げます。ありがとうございます。

決めた。日曜日の午後にした大きな理由として、地域の方に弘前学院大学の文化サークルの活動をご覧になっていただきたいという思いがあった。

このイベントでは、軽音部、書道部、天体観測同好会、そして私達吹奏楽団の四つの文化サークルが集結した。各サークルで自分の活動の発表や展示、体験を行った。私達吹奏楽団は、二十分間×二回のミニコンサートと楽器体験のブースを開いた。ミニコンサートでは、一回の公演につき四曲演奏し、合計八曲演奏した。そのうちの二曲は、軽音部から一名と一緒に演奏していただいた。ベースを担当して下さり、私達

文化サークル発表会「天体観測同好会」

天体観測同好会代表 日本語、日本文学科二年 関戸 颯汰

天体観測同好会は今年度から発足した新しい同好会で、メンバーは現在10名在籍しています。毎週金曜日に集まり、星座の勉強や天体観測をしています。夏にはペルセウス座流星群観測のためロケット相馬で合宿を行い、参加したメンバー全員と流星観測することが出来ました。まだ同好会であるため、天体望遠鏡や、星空を撮影することが出来るカメラなどは、資金が足りず、今年度の観測は肉眼でしかできませんでした。そのため、来年度にサークルへと昇格し、十分な天体観測するための機材をそろえるために、今回、文化サークル発表会へ参加させていただきました。

文化サークル発表会では、同好会で今まで行って来た勉強会で得た知識や、合宿で観測したペルセウス座流星群についての事を、ポスターを使っての発表を行いました。

吹奏楽団は練習の時から新鮮な気持ちで、非常に楽しく演奏することができた。このように他の文化サークルの方と交流を図ることができ、非常に良い経験となった。同じ大学の文化サークルとして、今後さらに交流を深めることができた。文化サークル全体の活動の盛り上がり期待されるのではないかと考えている。

このイベントを開催するにあたり、学長をはじめ、教職員の方、各サークルの代表者及び参加者の方々には、大変お世話になった。多くの方々の協力があったからこそ、開催することができたイベントである。私自身、代表として至らぬ点は多くあったが、多くの方々



最後に、130周年記念式典

と重なってしまい、文化祭が今年には行われぬという状況の中で、文化系サークルの成果発表の機会を設けようと動いてくださった。また、同好会として発足したばかりの天体観測同好会にも機会を与えてくださった。文化サークルフェスティバル代表と、事務の方々に感謝いたします。



参加者として感じたこと

軽音部 英語・英米文学科二年 赤平 駿太

本学主催の「文化サークルフェスティバル」で、私は軽音部のメンバーとして参加しライブを行った。ライブは初めてでは無いのだが、いつもとは違う緊張感を持った。

その要因として、来観者に披露する場所が定期的にライブを開いているライブハウスと異なっていた。学校の教室ということや、来場者も普段とは異なりほとんどが今回の演奏が初見となる地域住民で、演奏を聴いて本学の軽音部を評価する人もいるであろうということがあげられる。そのため、本学の軽音部の代表として良い演奏をしようという心構えと責任感をもちながら演奏することができた。

軽音部は、今回一年生二人、二年生二人、三年生五人の計九人で、一人一作品の出品となりました。作品の内容は、書道部としては年度最後の展覧会という形になりましたので、今年度書いた作品(臨書・近代詩すべてを一度に見ていただくことができるという非常に見ごたえのある内容だったと思います。)

来年度の文化祭の先駆けとして行った発表会ということで、「書を楽しむ空間づくり」を意識して取り組みました。書道部はただでさえ、他の文化サークルとは違って、基本的にその場で何かパフォーマンスをするものではなく、何日もかけてやっとできた作品を展示するしかないため、

書を楽しむ場所を

書道部部长 日本語、日本文学科三年 川口 侑華

め、興味がない方はどうしても立ち寄りにくい所という認識になってしまいます。それを解消し、かつ見に来てくださった方々にじっくり作品を見ていただくための穏やかな空間になってくれればという気持ちで恒例の「書道体験コーナー」やお茶菓子なども一緒に導入しました。結果はとても好評で、ただ立ち見だけするのは違って、墨の香りや和の雰囲気を感じて楽しむことができました。特に小さいお子さんなどは学校で筆を持つ時と違って、自分の好きな絵や家族の名前なども書くことができるため、書道への興味を持つきっかけにもなっているように感じました。

そして、やはり一番うれしかったのは、見に来てくださった方々が、その場にいる私たち書道部員にどんな話しかけてくださったことかです。「すごい上手だね」、「これ何日かかったの?」と普段話すことがない地域の人と軽音部以外の文化部である天体観測同好会や吹奏楽部なども拝見した。どの部も非常に熱心で、楽しみにやっています。見ている楽しい気持ちになってしまった。そのことから、文化祭などの催し事は出演者の良いものにしてほしいという一生懸命な気持ちと、参加者がともに楽しんでいるという雰囲気によって賑やかなる事が決まるものだと実感した。

今年度私は三年生になり、文化祭では中心になって参加することになる。その際に、先述の



今回実感した事を意識し、今年の文化祭を盛り上げることに役買うつもりだ。



たちとふれあう機会にもなり、私たち部員の大きな励みにもなりました。学生がやる書道展の良さはこの身近さにもあると感じました。

普段から書にこそしむことが無い方も、同じようにその空間を共有し、書を純粋に楽しんでいただけたいと思います。今回のことを来年に活かし、自分たちも楽しみつつ、書道の腕も上げるようこれからも日々精進して参りたいと思います。

最後に、このような催しを許可して下さった皆様、他の文化サークルの皆さん、また当日おにぎりやとり汁などのふるまいをして応援して下さった先生方に深く感謝致します。